

黒川高秀君追悼文 二

東谷 勝司

東谷勝司先生は黒川高秀様がいつまでもお慕いされた千二小でのご担任で、会誌第8号に「雪月星花・・・ものがたり」をお寄せいただきました。又、昨年の第12号の「東谷睦子先生の思いで」の睦子先生のご主人で、お二人ともお元気に千里山でお暮らします。
(編集部)

とにかく元気いっぱい、活発なクラスであった。中でも黒川君はその最たる存在であった。

本誌に平田 坦君が寄稿した「追悼文」の冒頭に、転入生であった平田君と黒川君の出会いに黒川君が示したやさしい心くばりのことを回想している。このような心くばりは又クラスの中で身体的にハンディを負った複数の級友にも向けられていた。ともすれば疎外されることのないよう、遊びの輪に誘い胴馬ごっこなど援助したりルールをかえたり、工夫していたのであった。



この写真は、松田嘉織先生が、カメラを手に入れて試し撮りといって放課後運動場で遊んでいた5年星組の男子を誘って学校の裏山で撮ったもの。後列の真ん中、肩を組んでなにか大声をあげているのが黒川高秀君。

●六年の三学期のこと。図工科を担当されていた西澤先生が卒業制作の版画づくりを指示された。各自思い思いの題材をきめることになり、黒川君は「雄鶏」を題材とし、大判の多色刷りという高度なレベルに取り組むことをきめた。何日もかかって、各自家で作業を続け、期日がきて教室で真剣な面持ちで刷り上げにかかった。完成した黒川君の作品は、これまでそれほど高い評価を与えていなかった西澤先生が思わずうなる程の、力強いタッチの見事な出来栄であった。それから数日後、黒川君は「版画ができるまで」と題して四百字詰原稿用紙になんと百枚を超える作文を提出した。雄鶏を題材にした動機にはじまり、制作の過程で苦心したこと、心のうごき、友人や家族との会話を織り込み、そしてクライマックス、完成した時の高揚感までいかにも快いテンポで綴る見事な作文であった。当時私は学期毎に謄写刷りの学級文集「ひろっぱ」を発行していたので、この黒川君の作文を掲載することにした。宿直の晩、職員室でガリ版、鉄筆で、徹夜に近い長時間かかって原紙に書き写したことを思い出す。もちろん、刷り上げと綴じは黒川君らがわいわい、にぎやかに手伝ったのであった。

●ここで、黒川君が自らのように小学校時代を回想しているかを知る格好の一文を挙げてみたい。それは、昭和三十四年に作成された千二校創立三〇周年記念誌「三十年のあゆみ」に当時東大医学部に進学していた黒川君が「母校を想う」と題して寄稿したものである。(その全文は本誌12号に掲載されている) 抜粋して再録してみる。

・給食はまずかった。六十人に及ぶ大クラスにはいかにも教室が狭かった。設備といい、運動の道具といい、条件は底をつけていた。しかし先生方から受けた若々しい希望のいぶきがあった。自由の、発展の、希望の新鮮な喜びがあった。(略)

全てが「試み」の可能性豊かな時期でもあったのだろう。いささかの情況の羅列をお赦しいただきたい。運動場の西南の崖の上にあった小さな池を職業家庭科の時間にモッコをかついで埋めたのは私達であった。現在の鉄筋校舎のあたり一帯を運動場にする、という遠大な計画に納得したのであった。今も母校の北面に残るサクができ、ペンキを塗ったのも私達であった。(略)

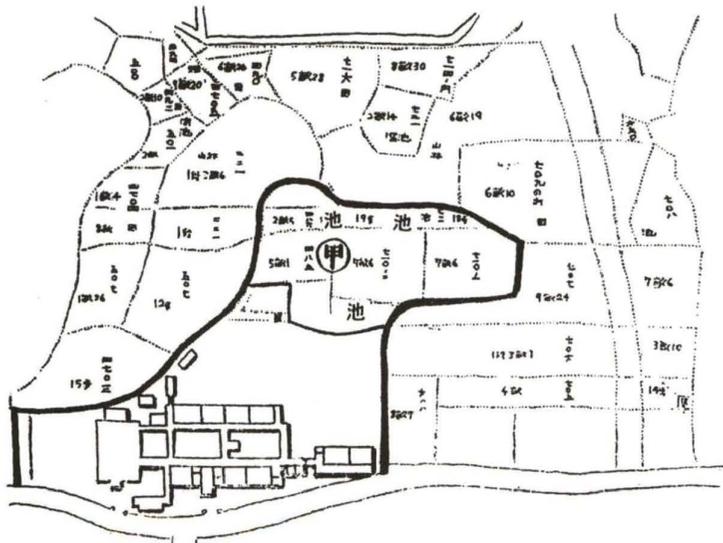
●生命の躍動を知った者の、新しい仕事の象徴とりたい。

文中「崖の上」とは、昭和二十三年当時激増する児童数に比してあまりにも狭い運動場をすこしでも広げようと、学校の裏、丘の上(下の図面の甲)の土地を千二小PTAが負担購入したもの。六年三クラスの男子が家庭科の時間をこの整地作業に充てたのであった。担任の太田得至先生がしばしば私に「黒川君は実によくやる。がんばりやだ」と絶賛されていた。そういえば「さあ行こうぜ」と教室を飛び出し崖の上にむかっっていく黒川君の姿を覚えている。

私は今、黒川君の「回想文」をあらためて読み直し、次のように想像してみる。

昭和三十四年の春、帰省した黒川青年は、記念誌への寄稿準備のため千二校を訪れた。そこで彼が見開いた光景は、昭和三十年に結成された「千二校校舎増築促進会」の大運動による成果―丘の上の鉄筋三階建新校舎と、かつて整地作業に汗流した地の向こうにひろがる広大な運動場であった。彼は、しばし丘の上に立ちつくし、そして充実感と昂然の気をみなぎらせ、一気に書き上げたのであらうと。

校地・校舎の変遷図 その2 昭和23~24年 (創立30周年記念誌より)



■十年ほど前のことであつたか、六雪同窓会が開かれ、東京からかけつけた黒川君が、私の隣に座り、「先生、今度私は新しい病院の設立を任されています。この病院は患者にやさしく、大切に作る、素晴らしい病院にしたいのです。」と熱っぽく語った。

やがて昭和大学横浜市北部病院の初代病院長に就任した黒川君のすぐれた構想による病院づくりが軌道に乗りつつあつた矢先に、帰途、無謀運転の單車による交通事故に遭遇し、活動を断念せざるを得ない状態になつた。その知らせをうけて、なんとということしか言いようのないつらい気持ちに包まれ、彼の無念の思いを察すると心底胸痛む。

平成十年、東大教授を退任した黒川君から、退職記念品「医学は人を、過去・未来・未知の人につなぐ」と自筆を刻んだ骨ノミと東大整形外科同窓会誌「黒川高秀教授退官記念特集号」が送られてきた。会誌に掲載された「黒川教授最終講義」の項に、その講義のしめくりのことばとして次のような発言要旨が記されている。「医は人間愛」という彼の信条・理念の力強いメッセージであり感銘深い。

「学生へのメッセージとして）人が医学と医療をおこなうのは疾病による被害をとり去ることに加えて、医学と医療に、我々を人間らしくする、社会の倫理性を高めるといふ働きがある。業績至上主義や研究至上主義を克服して、文明を推進する労働ということを行動の規範にしてほしい。大学を去るにあつたの感想として、医学を学ぶ人が過去・未来・未知の人と結ばれていることがよくわかる。何か一言といわれれば、*Swedenborg* の『人にやどる天上の愛が、人を永遠にする』という言葉を贈りたい。」

黒川君はついに帰らぬ人となつた。今、痛惜の想いととも、黒川君の信条・理念が大学に、病院に、さらに多くの医療機関に生き継がれることを期待したい。

私は近頃、ちさと図書館通いを日課のようにしている。千二校木造校舎を復元した西棟に入る毎に六十年前にタイムスリップし、黒川君の元気な声、そしてひたむきに努力していた姿を思い浮かべるのである。

高秀君 安らかにお眠り下さい。